第八章

南海の女王陛下とジョグジャカルタ王宮との関係とジャワイスラム神秘的方法

第一節　ジョグジャカルタ王宮の神秘的な地位

〈259〉ジャワ人の見方によると、王あるいは政治の頂点に立つものは、他人の心が読める、すなわち神秘的な状態になる[1]ことができる人になるとのことである。このように彼は、ジャワ人の観点によると王は世界の安定を制御し守護するためにアッラーから一間を受けているということから、アッラーが創成した神秘的な力を結集することができる人であり王国内で準備していなければならないのである。それゆえ、王が住むための宮殿は神聖なる宇宙の中心として見られているのである。

この観点に基づいて、Mataram 王国は各地域に順位をつけて、、dalam(王都 Kuytanagara)から Negara Agung 地域、Mancanegara 地域、そして Pesisir としたのであった。(Sutjipto, 1980) このようにその支配地域を分割したジョグジャカルタ・サルタン国は王都からの同心円距離に依ったのである。(Soemardjan, 1981) これらの観点は、六曜[2]とつながりを有する吉方の空間に対するジャワ人の所得配分・階級と実は強いつながりがある。〈260〉Pigeaud(1977)と Soemodidjojo(1979)によるとpasaran(脚注参照)の日ごとに各々の吉方がある。Wage は北、Legi は東、Pahing は南、Pon は西、Kliwon は中間あるいは中心を指している。Mataram 王国の当地計画の基本はこの概念に基づいているのである。

上記のジャワ人の分類による方角・吉方はその方向を支配している dewa=天人[3]が存在していると信じられている。この dewa に対するジャワ人の信仰はインドネシアへのヒンドゥー教の進入とかかわっているのは当然のことである。インドのヒンドゥー教の方角を支配している諸 dewa は東方を守る Dewa Indra、南方を守る Dewa Yama、西方を守る Dewa Varuna、北方を守る Dewa Kuvera である。(Lohui-zen, 1955:359) ヒンドゥー教がインドネシアに入ってきた後、Sedyawati が述べている(1986:33)ように、この信仰は同地の状況に合わせられるとともにその名も少し変わり、いくつかが追加された。

「インドネシア文化史に関して行われてきた詳細な研究は、インドネシアに入ってきたインドの文化的要素は常にさらなる変化を遂げたという事実を明らかにして

---

1 ’ayn al-yaqin bi ri’yatillah
2 ジャワでは pasaran と呼ばれる Kliwon, Legi, Pahing, Pon, Wage の五種類となっている。
3 Dewa-dewi

いる。この変化と後日行われたこのインドネシア的な努力の結果の源泉になった力は『地元の天才、現地の創造力』の言葉で知られるようになった」。

ジョクジャカルタ王家の紋章で戦略的位置、地理学、神秘学イスラム神秘主義での後見人の教えの融合である

ジョクジャカルタ王宮の存在はジャワ人の宇宙観から切っても切れないものである。ジョクジャカルタ王宮はこの世界と宇宙の中心として機能している一方それを取り囲む超自然世界は宇宙を表徴しているのである。これは、過去から連続してジャワ人の思考様式は宇宙の合一感に支えられているとともに常に分類するための賢明さを性格づけられていると Pigeaud が述べているように(1977:80)ジャワ人はとある中心点に向って考える性質を持っている。<261>王宮は世界の中心、王国の自然界のみならず、自然界を取り囲む霊界の四か所の王宮や四方を支配する精霊という超自然界の中心として見られている。イスラムが布教された後とはいえ、四方は Jibril, Mikail, Izrail, Israfil に守られているというように調整がなされた。これ以外には、四方の守護神は Abu Bakar, Umar, Ali の精霊によって守られているとされている。預言者ムハンマドの立ち位置は上記の八人の守護神の中立軸にあるカーバ神殿のようなものである。この九つの軸こそがワリソゴを構成するジャワにおける初代のイスラム伝道師であったということから、それ以前の 9 人の dewa に対する信仰が、ワリソゴの組織の中で形成されたことが見つかったがゆえに、ジャワ人の大多数がイスラムにやすやすと引き込まれたのである。

インド化した東南アジアの国や都市、さらに宮廷は小宇宙であった(Heine-Geldern, 1942)と述べている一部の研究者の解析とこれは同一歩調を取っている。完璧な小宇宙としての国家や宮廷の構造は王朝を合法化する重要な要素の一つになっている。「銀河政策」として定義されたもの、すなわち曼荼羅として組織された一つの国、と Tambiah (1975:104)は Mataram を呼んでいる。Shorto(1963)、Tambiah(1976)、Lehman (1980)が描いたように Teravada 仏教[4]のシステムの中に、

[4] 上座仏教・小乗仏教

四方の守護神の目的とはサルタンの権威を注入するためだったのである。Moertono(1968:27)は国家行政も四つの層にその基礎をおいていることを指摘した。しかし、スピリチュアルな強さとエネルギーは幾何学的に作られるというアイデアも Sufi の伝統に存在したとはいえ、中心を取り囲む四人の守護神からなるという考え方は間違いなくイスラム以前から発している。Schimmel (1975:200-204)は、色々な部下に擁護された Qutb の Sufi のシステムであることを示している。このシステムとジョグジャカルタのシステムの違いは Semar を除く四方の守護神であり、伝道者たちではない。〈262〉上記の伝道者の立脚点がジャワイスラムの考え方では、精霊の位置と交換可能になっているのであった。

ジャワ人の観点によればこの四地点は超能力を有する霊体の宮殿の中心である。ジョグジャカルタ王宮を取り囲む超自然の宮殿のそれぞれは、霊体の国民を従えている独自の支配者を有しているのである。これらの超自然界の四つの宮殿の支配者たちは、南海の支配者たる南海の女王陛下と Dlepih の（チラチャップの Sandil Adipala 山で休んでいるとも信じられている)支配者たる Sang Hyang Pramoni (Dahyabg あるいは Kyai Semar とも呼ばれる)、Merapi 山の支配者たる Sekar Kedaton 女王陛下と Kyahi Sapu Jagad、Lawu 山の支配者たる Sunan Lawu 陛下である。(Subagya, 1981:123; Triyoga, 1991:94)

Snouck Hurgronje (Ossenbruggen 1977:57)によると、これらの四者はすべてが神の創造物であるとみられ、人間たち自身の覚醒を引き起こすための必要な神秘的な業務としていろいろな伝統儀式を行う必要があり、これら四者は総合体となるのである。このように、ジョグジャカルタ王宮はそれを取り巻く超自然界の四つの王国を統一する世界の中心として機能している。五つの王宮は、その存在を切り離すことが困難であり神聖な総合体となっている。霊界の四つの王宮は、神秘的な階梯の進行としての戒律と正道、真理、真実として比定される。神秘主義者はムハンマドの光を担ぐ中心軸にあるムハンマドの魂を有するものである。

第二節　ジョクジャカルタ王宮の図像学と建築における象徴主義の意味

ジャワ人の信仰の中で、宇宙の中心軸の守護者の中央にある預言者ムハンマ

ドそのままに、サルタンの超能力は色々な種類のオーラと宮殿深くしまわれている家宝の中心である。これは町の付近の厚い壁で保護されていて、その最小のものはベルベットの布で家宝は覆われて宮殿の中央付近に位置している。しかし、宮殿自体の中はマンダラの体をなしていない。〈263〉これはジョグジャカルタ王宮が小宇宙ではないと言うこと、あるいは少し異なる解釈ではサルタン国は「銀河系社会」ではない意味しているのではないのである。ジョグジャカルタ王宮とインド化の影響を受けた各国の宮殿との差異はお互いに異なる宇宙観にすべてが基づいているという事実から発しているのである。ジャワの王宮主観の理論では、王の力は神の啓示やかみからの委託の下位に置かれているのである。王宮は宇宙の模型であるが、それを代理している宇宙はイスラムなのである。

哲学的に言うと、王宮は小宇宙としての人間を含んだその周辺に遠心的に支配力を有していることになる。後日ジョグジャカルタの企画・計画・実行の源となったジョグジャカルタの宮殿の建築の形は命と人生のシンボルで満ち溢れている。形而上的神秘的のみならず哲学的人類学的方法も含んだ哲学的理解を与える建築物の形状で描かれているそのすべては神と人間と宇宙の関係を象徴しているのである。

ジョグジャカルタ・ハディニングラッの町の建設は、空間的次元や一時的な心身、始まりと終わりをカバーする大宇宙と小宇宙の完璧な洞察に従って計画された。約 5km にわたって延びている宮殿地域は、agni (Merapi 山)と udaka (南海)、Sitihinggul の上にある Maruta (新鮮な空気)の宇宙観の統一を構成している。Sitihinggil 自体は、その実施形態がアッラーが認めた(ridha)ある市は Khalifatullah として高められた人間の価値になるとして高められた土地なのである。これここがその Ibu Pertiwi の要素なのである。一方、点なる父の要素とはそのすべてが Hamengku Buwono の名前と決意において完璧にカバーする太陽と月や星である。ジョグジャカルタの町の構成スタイルは、実際にはジョグジャカルタは南部が霊魂の象徴で北部は実世界の象徴である二つの地域に分かれているという人間の体の形にならっており、これは Pangeran Mangkubumi の 1755 年における概念を基にした計画実施となった。

ジョグジャカルタの都市計画も、その各々が意味を持つ建物から構成されていて生まれてから死ぬまでの人生のプロセスについて正しく働く Krapyak-Keraton-Tugu の直線をなす想像上の軸の哲学的意味の協調性に基づいている。ジョグジャカルタの町の先駆者としてのジョグジャカルタ宮殿は Pangeran Mangkubumi と称号し、のちに Sri Sultan Hanengku Buwono 一世の称号で 1756 年、ジャワ暦 1682 年、に王位に就いた R.M. Sijno によって建設された。この建設物には互いに巻き付いた二頭の竜の形をした condrosengkolo memet[5]が Kemagangan 門と Mlati 門の扉にしめされている。ジャワ語では Dwi Naga Rasa tunggal である。Dwi は 2, naga は 8, rasa は 6, tunggal は 1 を意味している。後ろから読むと西暦 1682 年となる。

Woodward によると(1999)、Syariah でのスーフィズムと内省的な定式化と神秘主義的な方法と完全な人間の源と子孫をつないでいる、図像学と象徴主義、宮殿建築はイスラム的宇宙構造を描いているとのことである。これに続き、ジョグジャカルタ王宮で発行された冊子(Brotodiningrat, 1978)と宮殿の高官や王族へのインタビューによる Woodward (1999:293-314)の分析が見られる。

第三節　1980 年のジョクジャカルタ王宮の門

このそれぞれが相異なる宗教的な意味を有する王宮前広場、植木、建物、四阿、塀全体、門を含んで王宮は 14,000 平方メートルの敷地を使っている。

一神教の角度から伝統文芸について数多く述べられているものの、その中で醸し出された関係は宮廷の象徴主義で満たされただけであったことは明確である。その理由は、宗教上の問題で Serat Wind や Serat Cebolek のような文書への注目であったからであり、それ故に限られた観点から一神教を見ている。文芸の伝統では一つにする現象として一神教を利用するための努力は存在しなかった。宮廷の宗教は、しかしながら、王朝の合法性を確立するために存在したのである。それ故に、王宮は完全で、実在し、ジャワの政治理論とより大きな宗教時代における王宮の役割でイスラム神秘主義の役割を学習するために信仰されることができる源となっている。このように王宮は文書として解釈することが可能で、同時代のジョ

[5] 符牒の一種で数字を絵で表したもの。

グジャカルタの人々の説明とジャワ文芸とを比較することが可能なことを含んでいる教義の表明なのである。〈265〉

しかし、宮廷は単なる文書を超えている。それは国家と国民と定義される神聖な境内を構成している。この件でそれは、世界中のムスリムの中心となっているメッカのカーバ神殿に類似している。サルタンによって代表される神髄の具現化のための入れ物としての役割を持つ宮廷は、すでに何回も見てきたようにジョクジャカルタ、いや、世界の中心軸をなしていて、神秘の中心でありサルタン国の精神的な母体である。それは、上記の王国の国民と支配地域へ拡散された王朝の力とアッラーの恩恵という名を通じた王国の伝統儀式の実行のための一つの段階である。一つの宮廷の部署から別な部署へ動くことでサルタンは、神聖な地域から出たり通過したり入ってきた神の恩恵の正道と力を制御し、特定の場所によっては超越あるいは内在するアッラーの性質を具現化もするのである。

この理由とは宮廷がジャワ国の生活の中でかくして重要な役割を演じているからなのである。王宮が所有しているのは地域と住民、資源の支配を超えて、その法性を示す恩恵なのである。どんな要素以上に、宮廷そのものが土王や反乱者と王に差をつけているのである。ジャワの歴史の周期化は王朝の栄枯盛衰に基づく。ジャワ人は Kartasura あるいは Majapahit 時代を、各々の王や王朝ではなく王宮を参照することで語るのである。Ricklefs (1974:83-86)は、王宮の建設は新しいジョグジャカルタの王国の正当性を安定化することで重要な一段階であったという説を有している。その理想とは新宮殿を毎世紀の初期に建設しなければならないということである。このアイデアは muhyiddin(宗教のリフォーム)に関するイスラム理論を国家に適用するものである。この更新が一世紀に一度(Schimmel 1975:247)発生するという信心よりイスラムの伝統の方がより大きいからである。これは伝統的なジャワイスラムの中で国家の中心の名前で語られている。〈266〉

建築的また幾何学的形状は線形をなしており、南北方向の軸に対応して門と広場から成り立っている。もっとも一般的な解釈で、それは完全な人体のモデルであり、人間の完璧化を目指すものである。それは wadah al wujud[6]と「七つの段階

[6] 神との合一

(martabat tujuh)」の理論に立脚している。宮殿の「教え」は 19 世紀の Serat Wirid[7] 文書の教えと似ている。この件で、宮殿の建築様式と Serat Wirid の教えが七つの段階理論に基づいており、ジャワの王族の支持で Serat Wirid の人気の高さによるものであったかどうかについてこの二つの比較が行われた。宮殿の建築様式はこの理論には基づいておらず、それは一般的な神秘理論というものを利用したものであった。

宮殿の建築様式が分類され中心軸の代表に入るとしてもこれは完全な人間の心は地球の柱とカーバ神殿と同じであるという事実によって可能ならしめられるのである。宮殿は人体の九つの穴を代表する九つの門を有している(Serat Wirid によると瞑想中とムスリムの埋葬儀式においては閉じられなくてはならない)。それは最重要な三つの部分に分割され、その各々は人体内における神性の保護の一つを代表する玉座を有している。

三つのうちの宮殿から南の部分は神の神髄からできた完璧な人間と王国の赤ん坊の誕生を描いている。このことは南から北向けて言えることでしかない。宮殿から北の部分は内省的で神秘的なやり方での宇宙観を形作るモデルを形成している。南から北に向けて言えば、それはアッラーとの一瞬の合一に向う道程を描いている一方、北から南に向けて言えばそれは宇宙観と最後の合一に向けての終末観を反映している。南側から見ると広場とその宮殿の中の部分は中心軸から上ること、天国に入りアッラーと永遠の合一に至ること、と同じなのである。この視点からいうと、サルタンは超越した神性と神の宮殿に、アッラーの玉座の周りにいる天使たちと似ている。

宮殿の象徴主義とジャワの象徴主義は一般的にひろく言葉の遊びや疑似語源に使われている。この件で、大衆の語源とはジャワ人を通して神秘主義的な要素と広い歴史を統合しようとする道具の一つなのである。音声学であれ何であれ共通するものは歴史と神秘を二つの用語で結びつけるための確固たる基盤となったのはアラビア語、ジャワ語、サンスクリット語、更にはインドネシア語であった。この象徴的思考の多様性は、間接的に歴史との関係のみならず音声学的に関連する何でも意味の組み合わせからの語義論の分野での交点でも一般的な音声学的

[7] 直訳すると「忠告の本」

特徴の存在という命題にその基盤を置いている。

同様なプロセスは、語義論の好転を確立するために、語義論の各段階に差をつけるために名目上意味付けられている各種の物質的な対象物の特徴を比較することを通じて使われている。さらには組み合わせの片方が宗教的あるいは神秘的な形であるときには他のものは仮定された交点からの性格でほぼ同一の幾つかの意味を獲得するのである。この象徴的思考の形はその意味においてとても生産的であり、比較的小さい意味の集合体を表現するための本当に無限の象徴のシステムを決まった形に作り上げるために使うことが可能である。それは、互いに関係していないとみられる現象の間の関係を確立するための議論としてのみならず公開の席上では言うことができない神秘的な知識に関する比喩的な声明を構築するための方法として利用されることが可能である。

特に妊娠と出産に関係するその南部にみられる王宮の象徴主義は色々なこの象徴的思考に依存している。この部分におけるシンボルの大多数は樹木や、偽の言語学を用いて完璧な人間を下すことに関するスーフィーの教義と関連する現生的なる物質である。〈268〉

宮廷の三分割された南の部分はさらに七つに分割され、その一つ一つが完璧な人間を下す段階の一つ一つを代表している。この形は Serat Wirid にあるものとぴったりとは関係していないので、そのすべては人間性の原型を下すというより王宮の子供たちの誕生を描いているのである。

第一段階は Krapyak と Mijen 集落を代表している。Krapyak は王宮から 7 km 南に位置している。その名は Hamengku Buwono I 世が狩りの時に宿泊に使ったその集落の南端にある小さな壁の構築物から採用されている。Krapyak を直訳すると「塀で囲まれた狩猟の保護」となる。これは alam barzah を参照するために使われている。Alam barzah はアッラーの真髄から分かれた後で胚の中に落ちる前までに魂が滞在する場所である。より一般的な理解では barzakh の用語は障害物の意味を持つ。イスラムの終末論では死んでから最後の審判までに魂が存在する段階がある。諸スーフィーは物質界と精神界との境界を呼ぶためにこの語を使った。いまだ生まれない子供のみならず死者の魂までも barzah の世界に存在するとい

いう説は、天と地が創造される以前に Nur Muhanna ら魂が創造されたという教義の論理を発展させた。この信仰は天地創造に関するスーフィーの理論において一般的である。(Massignon 1953:452) 宮廷の伝統によるとこの二つの概念は、アッラーがまだ生まれない魂を保護していてこの魂を世界に下すための時を待っているという意味とサルタンが閉鎖された場所で鹿を飼育していたことに関係している。

Mijen 集落は Krapyak の北部に近い場所に位置する。Mijen の意味は男女を問わないスペルマと同義である。男性のスペルマは白色で、スピリチュアルな体の源を形成している。女性のスペルマは赤色で、物質的な体と欲望の源を形成している。妊娠に関するジャワの理論によると、この二つは魂と同様に出生以来体内に存在するもので、後日必要となるまでは隠されていると信じられており、礼拝と熟考を通じて浄化しなければならないものである。このように、子供の発育の初期段階は天国とすべての人間の体内にある生に対する潜在力なのである。

第二段階は Mijen から宮殿南部の門に通じる道に代表される。この道は asem[8] と tanjung[9]の樹木と隣り合っている。Asem は nengsemakan[10]と同じとされ tanjung は disanjung-sanjun[11]g の語句と関係している。この二つは親に甘やかされて育てられた子供の人生を象徴している。かれも、時には神聖なもの重要性のために性的なものを置いてきた子供のように無垢な大人を参考にしている。Nirbaya の門は思春期の初期を記している。思春期の男女の儀式を象徴する樹木は入り口の門に植わっている。「若い」という文字どおりの意味を持つ微細な毛の生えたタマリンド(asem)の葉は sinom と呼ばれ、また美人のしるしとなる女性の額の短い美しい体毛を呼ぶのにもこの語が使われている。Wok に植えられた beringing の一対は思春期の男性のシンボルである。Wok の語は brewok[12]が語源である。門の扉は、男性では割礼の時、女性では結婚前に行う siraman[13]の儀式に準じている。この門の扉に関連する意味は性的欲求を弱めることである。

---

[8] Asem: タマリンド
[9] Tanjung: Mimusops elengi タンジョンの木。実は食用、生薬にも使う
[10] 楽しませる
[11] お世辞
[12] ほほひげ
[13] 灌頂の儀式

第三段階は南側の王宮前広場である。これは成熟した性を代表している。この広場は Pakel と Kuweni の二本のマンゴーの木で囲まれている。Pakel とは直訳すると「成人した」という意味を持つ akil balig を伴っている。Kuwei は wani[14]に似ている。この広場の真ん中にその上部を刈り取られた一対のガジュマルには Supit Urang と名付けられている。この樹木それぞれはコンクリートの塀で囲まれている。この樹木の象徴するものは大変複雑である。Supit とは karama inggil の語で sunat である。一方、urang はエビを意味する。

この文脈で、ジョグジャカルタの人たちは、この語句が皮をむかれたエビのように見える割礼された陰茎を参照していることを理解している。この剪定された樹上の形は割礼の象徴となっている。この一対の木は睾丸を表現していてコンクリート塀は、それを覆うか隠さなければならない恥部であるという表現をなしている。この解釈はジョクジャカルタ王家の王子に届けられた。この日本の木を囲む塀はその後、手袋などと同じ目的を有していて、イスラムではすべての性器を常に隠しておくために必要なものである。この木の前を横切る 5 本の道は欲求と五感を代表するものであり、この道と宮殿との間の隙間は満足させることができない欲求を表している。全体的にみると、南側の宮殿前広場は性的欲求を象徴していて、より難解なレベルにおいて神秘の総合体に対する熱情となっている。

Siti Hinggil Keraton Yogyakarta

第四段階は宮殿の南端にあるパビリオン Tratag Siti Hinggil である。このパビリオンは思考と感情を落ち着かせるための場所で木陰を作り芳香を放つ gayam の木[15]に囲まれていている。それは一組の大人の感覚を表徴している。

14 勇気あるの意味
15 Inocarpus edulis J.R.Forst.

第五段階は Siti Hinggil である。これは性的関係のシンボルで、Serat Wirid によると恥部に位置する Betal Muqaddas (Bait al-Makdis)という休憩所の玉座になっている。Siti Hinggil の南で開催される会見では、男女が同席することが許されている。これは恋に落ちた若い二人の親密さを象徴化している。このパビリオンは白と赤の花が混在した waru の植栽で囲まれている。このことは性的関係における精液と女性との融合を象徴化している。このすべての複雑性は、mekangkang[16]という語から発生した語である Pamengkang と名付けられた南部の野外の広場を形作っている塀と一対の道路によって閉じられている。この構造物は性的関係を持った時の女性を表現している。Siti Hinggil の東西部分は、性的関係を持った後行わなくてはならない(mandi jinabat)規範的なムスリムの神聖化の儀式に代表される沐浴用の水槽が置かれている。

子供の発育の第六段階は Siti Hinggil の南部に位置する Kemandungan 広場である。Kemandungan の語は ngandung[17]が語源である。この広場にはマンゴーの一種である palem と kepel[18]、cengkir gading[19]が植えられている。Palem は「互恵」あるいは「性的欲求」をも意味する gelem と共になっている。Kepel は直訳すると「ともに携える」という意味の kempel と関係している。<271> Cengkir gading は、妊娠七カ月目に行なわれる tingkeban の伝統儀式に使われるヤシである。この Kemandungan 広場から出る他の二つの門は、まだ生まれていない子供を危険にさらす他の悪い欲求と悪影響を代表している。

第四節　1935 年におけるジョクジャカルタ王宮の南広場北に位置する Siti Hinggil の位置

子供の発育における最後の段階は、Kemagangan 広場と王宮に入るための Gandungmlati 門である。Gandungmlati は瞑想中に見えるアッラーの真髄を形成していると信じられている緑色の光の束である。このようにして、この語は「出産」を意

16 「股を広げて座る」の意。
17 「含む」の意味だが妊娠を暗示しているのではないか。
18 Palem は観葉植物のヤシで、kepel は Stelechocarpus byrahol だ。
19 ココヤシ

味し、この門戸通るための狭い前庭は出産を表している。Kemagangan 広場は芽生えと赤ん坊の強さを代表している。これは、赤ん坊は完全には人間になっておらず、その善悪の潜在力は決められないというジャワ人の信心に対する土台を形成している。Kemagangan の東西にある炉はその両親から子供を得たことの保護を表している。この場所に向かう道はその子供の人生と共に歩むだろう積極的で消極的な道を表わしている。理想的な人生上の問題とは Kemagangan 門を通って Kedaton(宮殿の最重要部分)に向かう道である。この門を通る庭は、サルタンのみならずアッラーに対して仕える人生に入る道として解釈されている。

この七つの段階は、その両親の性のあり方をその後続いて発達させる肉体を伴った魂と身体を構成する最後の源と描くことで子供の出生を説明している。この設定は Serat Wirid と Serat Centhini[20]にあるものや誕生前の儀式のサイクルとはやや異なっている。この件に対する原因のひとつは、Sitihinggil の南と Betal Maqdis に配置されるためになぜこのシステムが適合されたのかということである。サルタンとアッラーの要素を同一化させることゆえ、この件は重要なのである。宮殿が人間の肉体の完璧なモデルになっているがゆえに、王位にある王が代表するようにアッラーの守護はアッラーによっておかれなければならない。<272>もしこの件が宮廷以外の赤ん坊に適用されるとしたら、宮殿南部の三分割はサイクルを形作っていて、Kemagangan 門を通ることは Kedaton の社会に入り Mijen で発育するという表現を構築している。この方法で、出生直後に子供はやがて次世代を創造する変容の階段を歩み始めていると考えられるのである。

宮殿南部を王国民の出産と発育のモデルとして見るならば、この最終段階は kawula[21]と gusti[22]としてのサルタンの各々の個性を確定するものである。サルタンに対して奉納される行為はアッラーに対する善行と同じなのである。サルタンに対する忠誠さはアッラーに対する善行と同じであるという見解と関連する解釈が、直訳するとサルタンが Sitihinggil の南に座った時の魂である、性器に存在するアッラーの真髄という理由でジョグジャカルタの王子によって与えられた。これと同一の論理を受け入れることで人はさらに歩を進めることができるのである。この王子は、

[20] 12 巻からなるジャワの伝承と教え
[21] 庶民
[22] 貴族

ジョグジャカルタの人の妊娠と出産前の発育を導いたその熱情のゆえに、彼らははサルタンに仕えていると観察している。

この宮廷の他の部分は、イスラム伝道者としてかつまた庶民にとっての神秘の案内人としての役割を果たしながらアッラーと神秘的な合一を行う方法とサルタンが従っている神秘的で宗教的な方法と関連している。

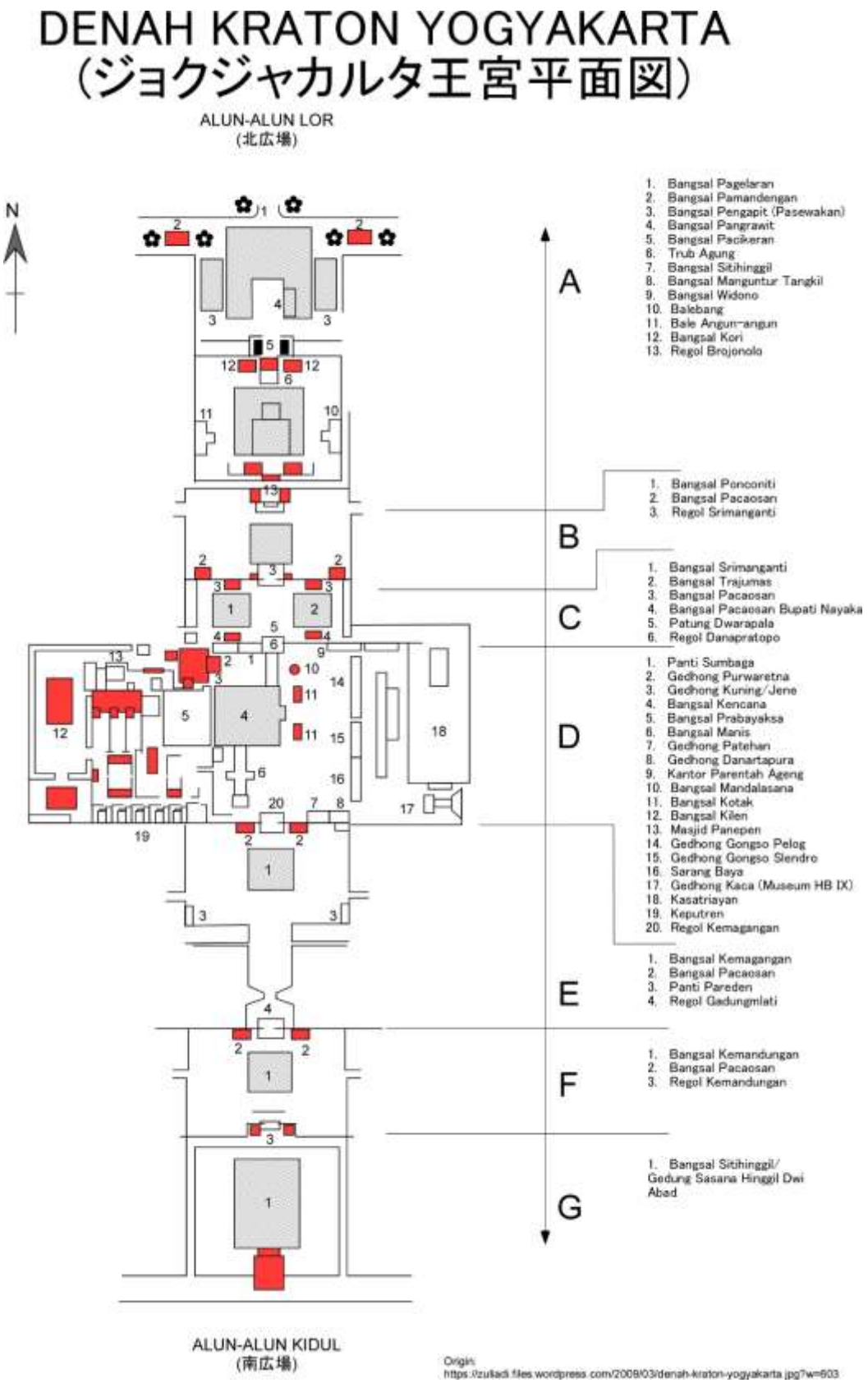
宮殿の北部は garebeg[23]の儀式を行うためのステップとして利用されている。この儀式はイスラムの聖なる三日間、まずはラマダン月の断食の終了式(garebeg sawal)としての Id al-Fitri で、ハッジと関連して行われる犠牲祭である Id al-Adha (garebeg besar)、ムハンマドの誕生日である Mawlid al-Nabi (garebeg maulud)をお祝いするために行われる。この儀式の時にサルタンは、北の宮廷前広場にある宮殿モスクへ持参する祝福を無料で分けあいながら宮殿内部から Sitihinggil へ進むのである。スーフィーに調停された役割を担っている[24]と想定されて、この王位にあるサルタンはアッラーと集まった庶民と合一したと信じられている。

宮殿内宮から Siti Hinggil までのルートは 7 ステップからなっていて神秘的な方法から内省的な形態のモデルを構成している。それはスーフィーの瞑想とムスリムの慈善のシンボルとなっている Danaprata 門から始まる。Danaprata の語はサンスクリット語の dana と tapa から来ている。ここでサルタンは、シャーリアによると、送ることも分配されることも重要なことであるモスクで分配され宗教的に役立つものであるギフトに注意を向ける。(Weir, 1953:483-484)

Sri Manganti 門を通り過ぎる時サルタンはガメランの楽器を収納している小さな建物 Bangsal Pancaniti を振り返る。この Panca (五)は panca indra (五感)を参照している。Niti とは詳しく調べるという意味である。この建物は、初心者が五感の知覚を支配するために努力し詳細調査を始める場所へむかう神秘的な道へのシンボルとなっている。

第三段階は Bangsal Pancaniti がある北 Kemandungan 広場に代表される。北 Kemandungan の意味は南にある相手の門とは意味が大いに異なる。ここで

23 一年に三回行われるジョグジャカルタ王宮の伝統儀式。
24 洋の東西を問わず王は聖職者に王位を授けられたことを言っているのであろう。



Kemandungan の語は、直訳では「集まる」という意味を持つ mandung と大変近いのである。南 Kemandungan 門のように大きな広場は kepel と cengkir gading の木々で満たされている。Kepel の語はこの文脈の中で「固める」を意味する kempel の意

味に近い。ここで palem cenking gading の木の色は、その解釈のカギを与えるのである。果実から発芽した葉は黄緑色である。黄色は宮廷の伝統的な色である。この色もアッラーの意向に完全に服従する色として信じられている。それ故に北 Kemandungan に含まれるすべての意味とは、神秘主義者(サルタン)はアッラーに対して完全にへりくだることができるように五感を統一しておかなければならないのである。

この道からの第四段階は Brajanala 門に代表される。Braja は「武器」を nala は心のため文芸用語であり、このようにこの意味は「心の武器」である。この門は信仰と欲求との間で起きる聖戦を参照している。〈274〉

その後でサルタンは Renteng Baturana と呼ばれる石の壁に至る。Baturana は「疑い」を、Baturana は「あけられた扉を遮る窓」の意味である。この用語は神秘化が超越しなければならない疑いという障害物を参照している。アッラーと人間の間の覆いとしての複数の情報提供者に参照されたこの障害物付近をサルタンは横切らずに進むのである。確かにスーフィーの教義によるとアッラーは 70,000 の人の魂とは離れているからなのである。(Nicholson, 1975)

スーフィズムの目的はこの覆いを取り除くことなのである。このイメージも宮廷のモスクで行われる Garebeg Maulud Dan の儀式でサルタンが実施する伝統儀式の中に存在する。(大 garebeg maulud はジャワの windu[25]のなかの dal の年に行われる) この時にサルタンはこのモスクを出る時にレンガでできた壁を蹴る。このことはアッラーの真髄からそれを分離させる覆いを壊すことを代表している。この行動はサルタンがアッラーの道具となり国民にアッラーの公正さを広めることとなるのである。

第六段階においてサルタンは Sitihinggil に向かう階段を上る。ここには特別な香りがするといわれる jambu tlampok harum[26]の木がある。Harum というジャワ語の語彙はメッカとカーバ神殿を参照するアラビア語の haram (神聖なる)から来ている。サルタンはこの木に注意を向けることによって、この純粋な香りとその神聖さを世界の指導者すべてがかげるようにその言葉が公平で神聖でなければならないと理

[25] ジャワ暦の 8 年
[26] フトモモ ジャワ語で tlampok arum

解するために臨席するのである。

Sitihinggil は瞑想の部屋であるとともに王座の部屋である。それは王の象徴とスーフィー神秘主義とを組み合わせており、完全なる人間がとどまるアッラーの加護がある Betal maktnur (Bait al-Ma'mur)[27]を表わしている。Siti Hinggil に入って、サルタンは四本の kemuning[28]の木を観察する。Kemuning は「純粋」あるいは「清潔」を意味する hening という語から来ている。この木はアッラーとの合体に至るために必要な思考の純粋化を象徴している。この木の北側には Bangsal Witana があり、Bangsal Mangunturtangkil がある。<275>Witana とは、「天国の椅子」を意味する古代ジャワ語であるとともに、現代ジャワ語での wiwit「開始」の意味も伴っている。それは思考の純粋化と瞑想の初期を象徴している。

Garebeg の間、Bangsal Witana と Siti Hinggil 付近は各々異なった服装をした王家の人たちが並び、サルタンの護衛隊(オランダ植民地時代にはオランダ政府代表も臨席した)も並ぶ。Ampilan (国家としての儀式の象徴)と数個の最重要な家宝が王座の左右に並べられる。王家の人たちと ampilan は瞑想の対象として機能し、一方この家宝の目的は、この儀式で悪の力に手を染めることに対処するためである。サルタンは kiai gantro kusumo (他には kyai Onto Kusumo という別名もある)という名の家宝の上着を着用する。この衣服はサルタンが最初に所有しムハンマドに似ていると言われたパッチワークの布でできている。この上着が再作成されたものとは言え、その基本はスーフィーたちの長い服のようにパッチワークでできており、神秘に至ってへりくだるシンボルになっている。社会に流布している複数の説明によると、上記の家宝の衣服は南海の女王陛下からの贈り物の一つであるということである。

Dampar kencana と呼ばれる玉座は Bangsal Mangunturtangkil に置かれている。Bangsal Witana の中にあるこの建物はアッラーの真髄が物質的な肉体にあるという教えの象徴的表現を構成している。Manguntur とは「突出した椅子」を意味し、他方 tangkil は「王宮に存在した」という意味である。宮殿の集合体と玉座、建物から

27 天国の家、だろうか。
28 ゲッキツ、月橘。花が芳香を放つ。Murraya paniculata

組み立てられた象徴主義はその魂を形作っているアッラーの真髄を与えることでサルタンが国民からの尊敬を受けるということなのである。魂の浄化のためという目的で演奏されるガメランの曲とモスクへ持参するこれらの人々に対する喜捨を伴うことでサルタンはアッラーと一体になると信じられている。

この時、奴隷と主人が同一化することに関する教えの社会的神秘的次元を象徴する象徴主義の宮殿最北端部分にサルタンの注意が向けられる。この玉座五の北の部分からそう遠くない場所に広場に向かう階段の横に Tarub Hangung（大パビリオン)がある。この建物は下級官吏や大衆がサルタンに謁見するときに使われる真四角で小さいものである。〈276〉その意味は、アッラーの望みに服従し瞑想を行うことに自己集中する人は連続して天国の部屋に存在するということである。

ここで、hangung はアッラーの偉大さを意味する。この王座からの俯瞰という見方では、上記の建物はアッラーとの合一の問題を象徴していて、その一方、依頼者からみれば、それは神性をマネするサルタンの性質に関する事実となっている。この二つの見方を組み合わせることで、サルタンへの服従という意味はアッラーに対する服従と同一なのである。

Tarub Hangung に向かう階段の下半分に pagelaran[29]がある。これは宮殿の主応接室になっている。サルタンに付き従って Siti Hinggil に行くことがかなわない地位にある官吏と地方の王族は朝の garebeg と他の国家的行事をここで待たされるのである。ここで彼らはサルタンとその政府に対して敬意を表するのである。税金と借地料を朝の garebeg maulud の時に支払ったため、一部は反逆と同様な不在となる。Pageralan の神秘的な意味は、神とのコンタクトを取る人にとってはすべてのことが明確であるが故にかれはアッラーから直接の命令を受けるのである。Pagerlan の語は gelar から来ている。この語の意味は極めて複雑で込み入っている。それは gelar[30]（宮廷の)であり「前に広める」ということにもなりえる。すべての貴族はサルタンに対して整列しているのでそれとみられる二番目の意味は pageralan の意味において寄付を行うことである。ここでサルタンはアッラーと貴族とかわるがわるその地位を取るのであるが、その注意は貴族の集合とこのシステム中でのそ

29 サルタンとの会見
30 称号

の各々の性質から象徴主義に向きが変わり、ゆえにかれはアッラーから直接の命令を受けるのである。王宮前北広場は garebeg のために集まる庶民のために存在する。その象徴主義のすべては南の門とは異なっている。それはアッラーの無限さの一般的なイメージとなっている交替において瞑想を行っている間にみられる海岸線を表わしている。〈277〉

王宮前広場の真ん中に堂々と立っている榕樹(Kiai Dewadaru と Kiai Jagadaru)はマクロコスモスとミクロコスモスの独自性を象徴している。広場の象徴主義は Bima が海中で Dewa Ruci と出会ったという Dewa Ruci の話と似ている。この二つの木の名前は、サンスクリット語では神(dewa)と世界(jaga)の語から、アラビア語では地域のための dar-al と関係している語から来ている。ゆえにこの二つの語はそれぞれ「地方の神々」と「地方の世界」を意味している。Kiai Dewdaru はアッラーとサルタンを表わして小野 Kiai Jagadaru は一般的に人間性と特にサルタン国の国民たちを表わしている。サルタンに上奏するために Pagelaran にやってくる豪族だ、けであり、一方、上奏する人は、彼らがサルタンの気を引くという不公平さを望むとき、pepe (上記の二本の木の間で日焼けする)と呼ばれる伝統儀式を行うことができる。奏上者の社会的地位を見ることなしに上記のケースを決めることを要求するこの儀式の間上奏者は白い着物を着て(上奏する内容が純粋であることを表わす)各々の木にお供えものをして、サルタンの注意を引くために微動だにせず座るのである。

預言者ムハンマドの亡くなった年齢である 62 という数の榕樹に囲まれているこの広場は神秘的知識とアッラーの無限性を代表している。この広場は Garebeg Besar の時の朝の礼拝をおこなう場所としても使われている。このすべての教えとして Serat Cebolek の中にみられる lakon Dewa Ruci 版が代表とされる。際限のない神秘的知識の海は規範的信仰の象徴を伴われていて、その間で神秘主義者たちは創造主と被造物の同一性を述べるのである。この教義の社会的次元は、敬意を払いにここにやってきたひとたちはサルタンに申請しサルタンから恩恵を受けることなのである。広場や Pangelarn、Siti Hinggi に集合している人のグループはすべてのジャワ社会を代表しているのである。社会的なヒエラルキーはサルタンの親戚に近いことを利用していて神秘的方法における地位と同様とされている。

<278>神秘の理解の中のみならずその語からの社会も、その合体は広場にある二本の榕樹の象徴主義的に、サルタンに申請を行う権利を有する貴族とはいえ申請者の現実を明瞭化させるのである。宗教的理解において本件は、すべてのムスリム社会の構成員はアッラーから見て同じであるという教えの表現を構成しているのである。

とはいえ、宮廷前広場は神秘的な道における目的地を表現しているものではないのである。それは合体(kemanunggalan)の知識を構成しているのでありそれ自身の合体ではないのである。サルタンや宗教指導者だけに使えるその中間の道は神秘との合体へ直行する方法を表わしている。この王宮前広場北側の交差点は神秘への注目を妨げることができる誘惑を表わしている。この交差点から最も危険なのは市場と首相官邸(patihan)である。市場は財産と官能的娯楽と社会的不和を表わしている。

行政と支配からの現世における観点を押し付けることによって首相官邸はその危険度が市場と同等になる。行政上の決定は魔力の利用を巻き込み、地位と権限を有するがゆえに彼らはアッラーのようになっていると考える人たちを付き従えるので首相官邸は最も危険度が高い場所なのである。この魔力と政治力を正しく使わない場合はこのことがサルタンを国民から切り離してしまうことを伴うのである。首相官邸で働いている人とは主に尊大さの意識を主とする者であり、彼らはサルタンやアッラーに登用されただけであると常に考えていなくてはならない。

Tugu[31]は高さ 15m の石像のモニュメントであり、宮殿から 2.5 km 北側にある。それは神と信者とと合体からみた社会的な目的地であり神秘の行きつく先であることを表わしている。宮廷の伝統では、サルタンに表敬訪問する大衆にとってこの塔が方向を示す標柱として使われているという説がある。これ以外に、この塔はサルタンの守護霊である Kiai Jaga が住んでいる場所として信じられてもいるのである。

サルタンの注意がこの塔に向けられる時それは国民にとって寄付はモスクに持参しなければならないという一つの印を与えるのである。サルタンと国家と国民の繁栄のためにアラビア語での祈りの後、上記の gunungan[32]は待っている群衆に分

31 塔
32 寄付された品々のことであろう。

け与えられるのである。〈279〉

宮廷からのおさがり物はサルタンをイスラム伝道師として印象付けている。宮廷に南から接近することは魂をこの世に下すことと完璧な人間の起源を指示していて、北からの接近はスーフィーとイスラム教徒たちとの関係を明確化するのである。個人的に神秘主義を実践しなくても、この文脈でサルタン国の国民はサルタンの神秘的到達点からの果実を受け取るのである。この神と人間との合体の定義からみた政治・社会的構成はアッラーに対する善行を行い恩恵の源となる(Schimmel, 1975:205-207)一人の伝道者の中においての吸収や滅失に関してスーフィーの教えの代わりとして極めてよく理解できるのである。規範的信心の指導に合わせるだけで伝道者(サルタン)の恩恵に大衆はともに浴することができるのである。

この伝統行事の grebeg の中で参加者たちはイスラムの信仰告白を読誦し国立モスクに入る前に規範的な禊の伝統儀式を行う。宮廷の伝統によると、この儀式はイスラムに改宗することを受け入れてもらう手段の一つになっていて、それ以前にイスラム教徒の政府から住民たちに与えられる供え物を受け取ることができるようになる前に、男性たちは割礼を要求されるのである。

この後見制と王制の対は中部ジャワにおいてスーフィー神秘主義帝国化はもっとも合致する例の一つとなっている。簡単ではない宮殿の北側への接近は宗教的到達とサルタンの証明に関する請求を作るのである。それも宗教指導者と信者たちの間の関係と政治・社会組織のモデルとしての神秘方法の構築を利用している。この Garebeg は王家と国民の繁栄を確定し、サルタンが世俗的支配者であるのみならず宗教的献身の対象となるところで宗教政治へ依存システムにこれを描くのである。

北から南に読んでみると、宮殿の北部は終末論者的な方法とアッラーへの一体化の問題を構成している。それは Serat Cebolek の中にみられる信仰とすでに死んでしまった人たちがアッラーと最終的に合体することができるという庶民の終末論に根差している。それはまた神秘的意味と宮廷の中央部にある kedaton の世界観に鍵を与えるのである。

再度、伝統儀式 garebeg 中におけるサルタンの行幸は重要な価値を有してい

る。この儀式の一部は jengkar dalem[33] (祭司の部屋に戻る)として知られている。それは世界軸からの起源と死と同等なのである。Siti Hinggil を出る時に、サルタンは Kemandungan の庭の keben[34]の木々を見上げる。ここで keben は tangkeben と近い。この木の意味は、体にある穴は本当は閉じていてなくてはならず、死に近づいている出来事として五感の知覚も閉じていなくてはならないのである。

Sri Manganti 門を通る時、妻子を伴ったサルタンは Bangsal Sri Manganti で休憩をとる。これは死と最後の審判との間の時間を表わしていて、ここでその間に聖なる魂は alam barzakh[35]で天国の楽しみを味わうのである。冷たい新鮮な水が、コーランと alam kubur[36]に滞在している魂にムハンマド、キブラの方向について尋ねる天使に代表される二人の従者によって提供されるのである。

Bangsal Sri Manganti を出た後サルタンは Bangsal Traju Mas (黄金の天秤ばかりの建物)に向かう。Traju Mas の語は、最後の審判の時に善悪を量るためにアッラーが使う天秤秤を指し示している。この建物を観察することでサルタンは(家族を代表して)現世の欲求からの一時的な性質を認めなくてはならず、すべての行為におけるその善悪の違いの重要性を評価するのである。

その後、注意は Gedong Purwaretna (最高の宝石の塔)に向けられる。この話の三つの建物は Sri Manganti と kedaton の間の壁として張りつめている。Purwa の文字通りの意味は「最高の」である。ここでこの意味は。起源の形をもって、神秘的生き方の最終目的は、肉体と精神が各々の起源に帰するという教えに準ずるのである。Retna の文字通りの意味は「宝石」であるが、ここではそれは世界でアッラーの真髄を経由することが明確化される光を準ずるのである。この建物はイスラムの宇宙モデルと完璧な人体、秘法を構築している。その三階は syariah, thariqah, haqiqah[37]と肉体を構成する四つの要素、土と風と火と水を代表している。〈281〉

Sri Manganti と kedaton との間の建物の配置理由はすべてが明らかにはなっていない。多くの王子たちは、サルタンだけがその意味を知っていると述べていて、

33 ジャワ語のもともとの意味は「宮殿の出発」。
34 ゴバンノアシの木
35 死んでから最後の審判までの間の魂が貯留される場所
36 alam barzakh に同じ
37 イスラム法、スーフィズムの修業の道程、神秘的真実

この建物に関して話すことを拒んだ。それは人が死ぬときこの世(Sri Manganti)とあの世(kedaton)の間に存在することになることを表現しているのだと他の人は言っている。

続いてサルタンは Danaprata 門を通って kedaton に入る。この門を支える四本の柱は秘法の発達という点でそれぞれ異なる意味を持っている。東側の二本は一つで syariah と haqiqah の組み合わせを表現していてその意味は慈善行為であり、他方、西側の二本の柱はアッラーの正しさの表現として haqiqah と makrifah の組み合わせを意味している。この門の他の方角にある二人の巨人は、悪事を行うときと道徳的な行いを取るときに伴って出てくるいろいろな欲望を表現している。

その前に、宮廷前南広場の眺望からみると kedaton は国家の政治・社会的生命を表現しているということが見られるのである。南からの宮殿への接近は alam barzah からの魂の下降を表現している。同様に、サルタンは世界の王としてあるいはアッラーの神髄と一時的に合体に達した時の伝道者として Danaprata 門を通って出るのである。Sri Manganti (宮廷への訪問者が普通使う門)の見方からすると、通過する門の広場は alam bazah から上がる世界軸であり、一方 kedaton 全体は魂に囲まれアッラーの玉座が置かれる場所であるカーバ神殿である。この二元性は基本的に異なる二つの建物から kedaton が成り立っていることによるものであろう。一つは王子たちや侍従たちが住んだり、図書館や倉庫、異世界の構造物である事務所から成立している。もう一つは王座のある部屋とサルタンの居室からなっているだけである。この構造物は後で議論することにするが神秘と宇宙観の意義を深くカバーしているのである。〈282〉

第五節　　1989 年の Malioboro

サルタンは kedaton に入った後つづいて Bangsal Kencana に移る。この構造物は神と人間の合一を表わしていて宮殿儀式の中心である。この文脈で上記の kencana とは、それを通じて神髄を顕在化させるすべての光の合体を表わしている。それ故に、黄金が王国の色を表わしているとは言え、サルタンだけが金色の傘を使うことを許されるのである。

国立モスクでの儀式を完璧にするために王座と家宝は Bangsal Kencana に持参されるのである。ここでこの後、文字通りの意味だと「拳でおこなうパーティーを行うために」という ngepeli と呼ばれる儀式をサルタンは行う。サルタンは王座に座り、家宝と道具と王宮のスタッフに囲まれる。スナン・カリジャガが所有していたと言われる鍋にご飯が準備される。Pengulu[38]は国家とサルタンの平穏を祈ることを求められ、その後サルタンは王族と宮廷官吏にご飯を分けるのである。この儀式は、家宝に掛けてあるベルベットを開ける時になっている。これはサルタンと従者たちの神秘的な力と宮殿の神聖さの故にありうるだけなのである。

この伝統儀式は国立モスクでその前に行われる儀式と同じである。Siti Hinggil に同行することが許される宮殿のスタッフだけが臨席する。このように、この儀式ではとんでもなく大きな神秘的な意味を有している。サルタンが Bangsal Kencana の王座に座った時彼は地の代表になりアッラーとしてふるまうと参加者の一人は解説している。Bangsal Kencana は心を守る場所カーバ神殿と同時により高度な天国でのアッラーの王座の場所を構成している。宮廷の人たちは、上記のアッラーの王座を取り囲む天使たちと類似している。Bangsal Kencana はこのようにして世界の中心で Siti Hinggil の南北を貫く線上にあるのである。

宮殿と自然の中心点としてその位置を見ることなしに、Bangsal Kencana は宮殿内で最も神聖な部分ではない。その横にある Bangsal Prabayeksa を見てみよう。Prabayeksa の文字通りの意味は「輝く光」である。それはただアッラーの王座のようなものではなく、形を持たないアッラーの表現である。Bangsal Prabayeksa はサルタンと最高位の侍従以外の何人も入ることができない大きな応接室である。この部屋は聖なる家宝を保存し敬うために使われる。その中央部にはその火が外部に持ち出すことを許されたことが一度もない Kiai Wiji と名付けられたランプがある。Wiji の文字通り意味は肉体と精神の源の「精子」である。しかし、この文脈の中でその語はアッラーの神髄すなわち肉体のみならず精神の最終的な向上の源を参照するために使用されている。このランプの光は王宮前広場の木々とは異なり、神秘の国の象徴的表現をなすために意味するものではない。これ以上に、それはアッラーの神髄と国家の生命、サルタンの啓示となると信じられている。

[38] 儀式の進行役

Ngepeli の伝統儀式の後、上記の最も神聖な家宝の守護を行っている選抜された王子たちを引き連れてサルタンは Bangsal Prabayeksa に入る。この行動は目に見える形ではスーフィーの瞑想の最高位であり神秘的な方法での世界観を構築する目的ということを描いている。

上記の kedaton 内の他の建物は、死後の人生に関する規範的なムスリムの観点を描いている。Gedong Kuning はサルタン個人の宿舎であり一つの楽園を表現している。Kaputren は、普通儀式の遂行のために用いられる家宝の大まさかりの家として使われている小さな家によってあらわされている情熱的欲求や地獄に導くことになる行き過ぎた趣味を代表している。とはいえ、この Bangsal Abang の建物は怒りの感情を伴っている。Kedaton と Siti Hinggil 内にある感情表現は、アッラーの神髄のみならず感情はこの周辺の三か所に各々存在するというジャワの信仰ゆえに、重要なのである。Kedaton はアッラーの王座であり、完成した人間の心であり、このことが魂にしっかりと握られた欲求の表現をカバーしなくてはならないのである。

第六節　ジャワイスラム哲学における南海冥府の女王の神秘的図像学の位置

その結論とは、ジョグジャカルタの王宮は人間の性格に関して、その出自、アッラーとの関係、最終的な義務に関してスーフィーの理論からジャワ風なモデルを形成したものであるということだ。それは完全な人体と、三脚の玉座あるいは保護された場所で完成される一つのモデルを形成している。二つの Sitihinggil は完璧な人、伝道師、サルタンと普通の信者と規範的な信心で garebeg を通じて関係させるのである。宮廷の象徴主義はスーフィーのモデルのようなものと死後の生命に関して規範的なイスラム理論を形作り、宮廷を世界の中心軸として確立し、超越したアッラーの様相にサルタンを比類させた。それはまた、最も露骨な文章に比べたといえ、サルタンと国民との関係についての宮廷の見方と、内省的な定式化と神秘的な方法に関する世界観をより明確に描いているのである。

著者はここで、神秘主義の道に通じるためには人は、神秘主義の修業の四段階、イスラムの規律 syariat、正道 thariqat、真理 makrifat、真実 hakikat くてはならない。北から南に向かう宮殿の方向の概念と結びつけるとすると、北の方角は規

律を、東の方角は正道、南の方角は真理を、西の方角は真実として象徴しているのである。

この件もジャワの聖像学理論と同一である。北の方角にあるメラピ山の守護神としての Kanjeng Ratu Sekar Kedatan と Kyahi Sapu Jagad はイスラムの規律を象徴していて、イスラムの規律が宗教の「花」の位置を示しているので天国の香り(sekar kedaton)をにおわせて、現世の性質をもつものはすべてイスラムの規律で Sapu Jagad にコントロールされている。このモデルをもってこそ、個人が「正道」のレベルに上がる、すなわち Sunan Lawu に象徴される東の方角は国を捨てて王国を正道として高め、ラウ山で真実の命を発見した Brawijaya 王 5 世の魂としての存在なのである。Mokswa(神へ向かう昇天)の体験で、Sunan Lawu の昇天の象徴をもって信心深い人は真実性の恵みを得る、すなわち南の方向である。その聖像は「すべての幽体、霊体と魂の女王」として呼ばれている南海の女王陛下なのである。心理に到達したものはアッラーによって自然界のすべての秘密を開示され、その地位は幽体と天使を含んだ他の生きとし生けるものより高いのである。精神界と現実界での現実化はそのすべてがベールに覆われているため、そのすべてが最後をまだ構成していないとしても、なのである。

それ故にアッラーに向かって進んでいるものは、スナン・カリジャガの言葉に見える、Panembahan Senopati と同様に南海の女王陛下の魅力に捕らわれてはならないのである。南海の女王陛下で象徴される天女たちの魅力でその者は魂を満足させてはならないのである。その頂点においては上記のすべてのベールを超越することができ、アッラーは真実を徹底的に開示することになり、かれは真実の世界で日常生活を貫き通すのである。その象徴は Nur Muhammad を持つ人々で古代ジャワ人にとって神性を持つ Dhayang Semar なのである。Insan Kamil の象徴もある。その方向は月や星が沈む西である。それはすでに信仰の中に沈んだものとして存在する。現世的なものはすべて「無」に存在しているからそれらは自ら沈んでいるのである。それはゼロ点にある。

Inna lillahi wa inna ilahi raji’un

第八章　訳出終了 2019/12/17